
呪われた幸運の剣

兄琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた幸運の剣

【ZPDF】

Z9501G

【作者名】

兄琉

【あらすじ】

自分は勇者だと親に言われて育つたが全く信じていない至って普通の冒険者と冒険者の事を勇者と言う自称呪いの剣のお話。***
武器でドンパチするお話ではありません。***

(前書き)

はじめましての方はぜひ続きを読みたいと思います。他の作品から来て下された方はありがとうございます。作者の呪琉です。

このお話は… 読んでいただければ分かると思いますが普通のファンタジーものではありません。一人の冒険者と呪われた剣のお話です。

そんなに長い作品ではないので軽く読めるかと思いますので、ゆっくりと楽しんで行ってください。

俺は至つて普通の冒険者。

よくある設定として英雄になる事を夢見て旅に出している。
まあ正直腕は普通だし、両親は普通の農家だ。

普通とは言つてもゴブリン位なら倒せる。

後は両親が普通と言つのは多少の語弊があるが…。

何故かと言ひと、うちの親父は頭がおかしかったのだ。
ワシの爺ちゃんは勇者だつたからお前も勇者だと俺は言われて育つた。

勿論そんな都合のいい話俺が信じるわけもなく、いい加減田舎に嫌気がさした俺は勇者になると親に宣言して（当然嘘だが）多少の路銀をもらつて家を出た。

きっと俺が勇者になつて「勇者はワシが育てた」なんて事を言つたかったのだろう。

勝手な親父だ。じこかの監督みたいに。

因みに、今の世には魔王はいるらしいが今は大きな動きを見せておらず、時々魔物の被害が出るほかは至つて平和である。

別に俺は魔王なんてどうでもいい。

冒険者としてお宝の一つでも当てて、ゆつくつと過ごせればそれでいい。

もう一度言つ、俺は至つて普通の、そりゃ辺に生えている雑草の

数程いる冒険者のうちの一人だ。

俺は田舎からヒヤヒヤ言いながらもなんとか王都に着いていた。

来る途中に可愛い女の子の魔法使いを助けて仲間にしてと頼まれたり、世界を救えなどの耳鳴りがしたりしたが仲間が増えると宝を見つけた時の取り分が減るし、長旅の疲れで幻聴まで聞こえる始末だ…。

だが未だに物陰からはその女の子の視線を感じるし、時々苛立つているような幻聴まで聞こえてくる。

一日ゆっくりと王都の安宿で体を休めて俺は旅の準備とやらに街に繰り出していた。

今まで体験した事のないような人の多さに気が滅入るが俺は冒険者。

こんな街にいる事なんて滅多にないのを、と考え我慢する事にしていた。

街を歩いている途中でなにやら神官を怒らせて決闘をして勝つてしまい私を旅の供に！だとか

スリをした少年を捕まえて、財布を返してもらつて見逃してやつたら何故か見返りに王様が偽物だという情報を聞いたり
はたまたあの時の魔法使いの女の子とぶつかつてこれは運命の再会ね！とか言われたりした。

だが全部、殴つて黙らせて、だからなんだと無視して、逃げてきた。

そこでふと目に止まった店を見て俺はある重要な事を忘れていたのを思い出したのだった。

「武器、買つてなかつたな…」

そり、冒険者と言えば武器。

武器と言えば冒険者。

実家を出た時には先祖代々伝わるとか言つ劍を持っていた。
だけど今は持つてない。

あれは女の子を助けた少し後のことがだつたかな…。

旅の途中で休んだ時に近くにあつた穴に立てていたら、何やら洞窟が開いて剣が抜けなくなつたのでその場に置いてきた。

何故その洞窟でお宝を探さなかつたかつて？

俺も探そうと思ったね。でも中に入つてすぐに元氣でできた「一レムがいたから逃げて来たんだ。

魔法でもないとあんな奴倒せないね。俺素手だつたし。

そんなわけで剣を求めて俺は武器屋へと足を踏み入れたのだった。

…が

「た、高い…」

因みにこの武器屋は王都でも一番安い武器屋らしい。

しかし、ある武器はどれも俺の残り資金では買えるものではなかつた。

「2 - 000G、1 - 980G… 3 - 450G…」

俺はチラリと懷具合を確認する。

「…700…ゴールド…」

無・理

失意に飲まれる俺はふと武器屋の隅にある籠に目が行つた。
そこには

【展示品限りの大奉仕価格…!…さあ、持つていけイ!】

ガシイっと俺はその籠に飛び付き籠に無造作に放り込まれている剣達を目をおつぴろげて見た。

だがどれも1,000G程度の値段で、ギリギリ手を出せないものばかりだった。

しかし!天は俺に味方をしてくれるようだ。

二つだけ、二つだけ俺の現在の所持金(700G)で買える剣があつたのだ。

一つはなぜこんな所にあるのか不思議なほど鍛え上げられた剣。奥の奥の方に隠されて埃かぶつっていたからきっとだれも見つけられなかつたのだろう。

そしてもう一つは先ほどの物ほどではないが素人の俺が見てもまともな剣だった。

ツカの部分に真つ黒な宝石が埋め込まれている事を除いてだが…。

値段は前者は700G、後者が300G。

俺は苦渋の選択の末、前者を選ぶ事にした。

所持金は吹つ飛ぶが、まさに俺に見つけてほしいと言わんばかりの剣だつたからだ。

なに、金は明日にでも稼げばいいさ。
そしてなにより後者の剣はなにか嫌な空気を醸し出していた。
それに前者は持つてみると不思議と俺の手に馴染む感じがする。
もし俺が勇者だつたら「こ、これが神の宿りし剣、ホーリージャッジメントッ…！」等という展開になる事うけあいだらう。

「よし、これだな…」

俺は意氣揚々と剣をカウンターに持つて行こうとして剣を掲げた。
すると…

『よひやく、私を手に取つてくれたのですね』

……俺はくるりと踵を返し

丁寧に剣を元の奥の奥に戻し

300Gの剣を持つて再びカウンターに行つた。

何か剣が叫んでいる気がする。

あーあー、聞こえない聞こえない。

何故剣をもつただけでの幻聴と同じ声を聞かにやならんのだ…。

俺も遂に精神を病んでしまつたのかなあと軽く落ち込んだ。

「これからはお前が相棒だ、よろしくな

武器屋を出た俺は買った剣を大事に腰につけると宿に戻り、部屋で一度抜いてみた。

やはり宝石が黒い以外は全くもつて普通の剣だった。

『ククク…遂に抜いたな…これでお前呪いがかけられたぞ…』

頭の中に今までの鈴の鳴るよつた透き通つた声とは全く逆の、鉄を擦り合わせ地を鳴らすような声が聞こえた。

「……」

ガサガサガサツ、ガチャン！

流石剣、二階から落とすと結構な音がするもんだ。
いやあ残念、買つたばかりの剣が消えてなくなつた。
明日は適当な仕事でも見つけて金を稼ぐか。

そう言つて俺はまた安宿の固いベッドで眠る事にした。

もう一度言つておこう、俺はジャガイモ畑に咲くバラのバラではなくて、取るに足らないジャガイモの一つ、普通の冒険者だ。

今日もいい朝だ。

小鳥が窓の縁でさえずつているし、雲ひとつない快晴だ。
何も変なところなんてないぞ、だからさつと…

『クハハハ、我を手放そうとしても無駄だぞ勇者よ…呪いが続く限り貴様は我を手放す事は出来ぬのだからなあ、ハアツハツハツハ』

これも幻聴だ。

今日はしつかり働いて、資金を貯めよ。

丁度一階の料亭でバイトの募集があつたはずだ。
俺は声を無視して、いや元々幻聴だから気にせずに、下に降りていつた。

それから数日が経ち、資金も順調にたまり、俺は旅に出た。
そして分かつた事がひとつある。

『……』

この剣、幾ら捨てても戻つて来るのだった。

河に捨てては洗濯のおばさんが拾つて持つててくれるし。
王都の郊外の土に埋めては犬が掘り起こして拾つてくれる。
しまいには100Gで冒険者に売り払つたのだが、その冒険者が死んで何故かその仲間が俺の下に返しに来た。

「なあ、お前つて本当に呪いの剣なわけ？」

『む……よ、ようやく話しかけてくれたか……私は寂しくてさみしいや！別に貴様が話しかけてくれなかつたから寂しいわけではないぞつ……』

どうやら自称呪いの剣はシンデレラしかつた。

遂に俺も何もないところで話す精神異常者の仲間入りかと思つと嫌な気持ちだつたが、気になるモノは仕方ない。
どうやら俺も一人旅で寂しいらしかつた。

『ハツ…いやいや、うむ。我こそは魔王様直々に呪いをかけていた
だいた劍であるぞー。どうだ、勇者よー!』

「いや、そもそも俺勇者とかじやないし…」

『ククク、隠しても無駄だぞ、我には解るのだからな、クハハハハ
「あ、そ…」

付き合こきれない…。

俺はそれ以降その劍を無視して旅を続ける事を心に決めた。

それから十数年が経ち、俺はついに念願の豪邸を建てる事に成功
した。

あの劍を手に入れてから寧ろ俺は運が向いてきていたのだ。

剣を手に入れて以来あの鈴の鳴るような声は一切聞こえなくな
たし（自称呪いの劍の声は聞こえていたが）。

変な武芸者や神官や魔法使いなどとの面倒な遭遇イベントにも会
わなくなつた。

少し休んだところが偶然スイッチになつていて強い敵のいる洞窟
が口をあける事もなくなつたし、王様などのいらない情報も聞く事
がなくなつた。

それどころか偶然死にかけていた富豪を助け、多額の謝礼金を得
て、剣の言う通りに投資するとみるみる内に金は増えて行き俺は一
大商社を築くまでに至つた。

十数年前まで田舎にいた少年とは思えないほどである。

俺は正に出世街道爆進中だった。

富豪を助けて以来俺は常に剣を携帯するようになり、話も少しするようになった。

そんなんある田、愛する妻と娘がピクニックに行くと言ふ、俺は書斎にかけていた剣を外して腰に差した。

そして俺はふと、ずっと気になっていた質問を剣にしてみた。

「なあ、自称呪いの剣よ」

『クツ、だから自称は余計だつ。で、なんだ?』

相変わらずの地が鳴るような声で、しかし少し友好的になつた口調で剣が言葉を返す。

「お前はどんな呪いを俺にかけたんだい? そろそろ教えてくれよ」

そう、剣は話すよくなつてからもうこの話題については全く答えてくれなかつたのだ。

ふむ…と剣は少し悩んでから口(まあ口なんてないが比喩つてやつだ)を開いた。

『我が貴様にかけた呪いは…』

今まで何も起じてないにじりやはつこつこのを聞く時は緊張する。

俺は喉をじくじくと鳴らして剣の次の言葉を待つた。

『王に金に関する【幸運】……だ』

「…………は？」

俺はぽかんと口を開けた。

剣は『実際には勇者の発する氣^{オーラ}が出ない』よつてもしていたのだがな……等と言つているが俺には関係ないので聞き流した。

「いやいやいや、幸運ってプラスじゃないか」

『まあ……貴様にとつてはそうなのかもしれんな……。そもそも冒險をやせない様にする為の呪いだからのお……』

「まあよくわかんないけど……まあ死ぬとかじゃないならいや、ありがと」

『……礼には及ばんよ、勇者』

そうしてその30年後、俺は愛する家族と自称呪いの剣に見守られながらその幸運な生涯に幕を閉じたのだった。

最後にもう一度だけ言つておぐ、俺は数ある田立たない星の内の一つになつた、至つて、全く持つて普通の冒險者……だった。

おしまい

(後書き)

『呪われた幸運の剣』いかがだつたでしょうか。

書きたい事はあるのですが、敢えて伏せよつかと思います。このお話を読んで色々と妄想（？）を広げていただければ作者としては嬉しい限りです。

「意見感想、叱咤激励心よりお待ちしております。

…あ、もしよろしければ他の私の作品も見て行ってくださいね（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9501g/>

呪われた幸運の剣

2010年10月8日14時17分発行